

にまずはお母さんが、やがてお父さんが亡くなってしまわれま
す。そこで阿部王樹という伯
父さんに引き取られ、弟さんと
二人育てられることになりました
た。やがて、「劇作家になりたい」
と國學院大學に進まれ、折口信
夫の短歌結社「鳥船」に入りま
す。ここから、伊馬さんの人生
における濃密な時間が始まって
ゆくと言つてよいのです。

一方で伊馬さんは、小説家の
井伏鱒二という、これもやはり
非常に濃密な人を、師匠として
持つておられました。そして、
この二人の間で、いろいろ心を
費やされたのだと思います。

折口先生のところに行くと、
池田弥三郎さん、戸板康二さん、
そしてそのいちばん中心に伊馬
さん。週に二回くらいは必ず折
口先生のところが集まって、い
ろんな話や相談をされています
た。井伏先生の用もあるはずな
のに、伊馬さんは言い出せない
ようでした。小説の書き方を知
るために伊馬さんが井伏さんの
ところへ行くことに、折口先生
はちっとも違和感を感じてはお
られなかったと思います。です

けれども、伊馬さんは何か遠慮
しておられたようです。

伊馬さんも大変だったろうと
思います。いろんな役者や作者
仲間、あるいはNHKの様々な
役職の人たちと会わなければな
らない一方で、折口先生の書齋
では心を切り替えなければなら
ず、また、太宰治など文学の友
人たちと止め処も無く酒を飲ん
で他愛のない話をする世界とい
うのも、他方にあつたわけでは
多様な交流を、伊馬さんは体験
し続けておられました。

折口先生にとつて、太宰とい
うのは、伊馬春部の友だち。一
度も会つたことはないけれど、
太宰という青年作家の苦しみと
何ともいえない魂のナイーブな
様子を、伊馬さんの話から感じ
取っていました。だから、太宰
が亡くなったとき、折口先生は
「水中の友」という詩を作つて
います。非常によい詩です。読
んでいるうちに、伊馬さんにも
投げかけている詩のような気が
してきました。

北九州芸術劇場小劇場
参加者Ⅱ約一五〇人

+++++
ラジオドラマ脚本
「屏風の女」を読む
10月26日(日)
+++++

鞍手郡小竹町出身で劇団「俳
優座」所属の俳優・矢野宣さんと、
小倉を拠点に活動を続ける朗読
家の三輪純子さんをお招きして、
伊馬春部のラジオドラマ「屏風
の女」の朗読会をこやのせ座で
開催しました。

「屏風の女」は昭和二十七年の
放送以来、薫り高い文学的作風
で高い評価を得、海外でも放送
された伊馬春部の代表作です。

矢野さん、三輪さんそれぞ
れのトークなども行われ、伊
馬春部の生誕地である木屋瀬
で、作品世界を満喫しました。

参加者Ⅱ二二二人



矢野 宣さん(右)と三輪 純子さん

+++++
文学講座
10月11日(土)～11月29日(土)
+++++

本展監修の棧比呂子さん、梅
本静一さんほか、五名の講師を
お招きして、様々な角度から伊
馬春部の魅力についてお話しし
ていただきました。

◎ 棧比呂子さん(作家・本展監修)

「伊馬春部の時代」

◎ 矢野宣さん(俳優)

「後輩思いの先輩・伊馬春部いろい
ろ」

◎ 舌間信夫さん(詩人・郷土史研究家)

「筑豊の文芸と伊馬春部」

◎ 小田次男さん(文楽を描く)画家

「僕の青春—ムーラン・ルーージュ新
宿座と伊馬春部—」

◎ 梅本静一さん(前北九州市教育委
員会委員長・本展監修)

「木屋瀬と伊馬春部—親族のかいま
見た春部の素顔—」

受講者Ⅱ各回約二十人



棧 比呂子さん

+++++
来館者の声
+++++

◇ 伊馬さんを知る人も年々少
なくなっている折よくそ回顧
展を企画されたと思つた。

◇ これだけの資料が集まって
いるとは思つてもいけませんで
したので感激しました。

◇ とかくエノケン、ロッパ、
夢声に目が向けられがちなこ
の時代、こうした(知る人ぞ
知る)郷土の著名人の掘り起
こしは素晴らしいと思う。

◇ 音楽と映像がとも懐かし
かった。

◇ 多くの資料に出会い、大正・
昭和の文化に力をそそがれた
氏の人生に感動した。

◇ 今回初めて知つた。地元の
作家についてもっと興味を持
ちたい。

◇ 伊馬さんのラジオ、幼い頃
良く聴いていました。

◇ 身近にこういう人がいた
ことを知りおどろいています。

このほか、たくさんのご感想
をいただきました。ありがと
うございます。